

裏にあって久米島を走っている」と、  
赤い屋根瓦の

沖縄独特の民家をたくさん見かける。  
その屋根の上にはシーサー、  
様子で、シーサー作りを堪能した。

シーサー作りを体験できると  
いうのでやってきた「やちむん  
土炎房」は、海岸沿いからウネ  
ウネと細い道を登った高台にあ  
った、不動産院の感覚でいえば、  
高級住宅が建つ場所。工房の庭  
からは、イラブーナや「はて  
の浜」を一瞥できる。吹き抜け  
の風のまわ、気持ちのいいこと、  
娘は庭でびよんびよんと跳ね、  
松の巨木の下、松ぼっくり拾い  
に精出し始める。

「おーい、娘、シーサー作るよ」と  
と呼びかけても、ピンとこない  
の様子。シーサー作りは5歳児  
以上は早かったかなと、チラッ  
かすめた心配は無用だった。  
工房の字江城弘子さんが用意  
してくださった粘土台の前に座  
り、ひんやりスベスベの粘土を  
手にしたら、お目々キラキラ。  
保育園で培った「粘土コネコネ  
魂」が燃えてきたみたい。

「では、胴体から作りましょう。  
まず丸めて、こんな棒状にして  
ください。」

スリスリ、コネコネ。無言で  
粘土をいじる母と娘。

「しっばをね、こんな感じで」



「んんん、なるほど。字江城  
さんの丁寧な説明を聞きながら  
シーサーの形を整えていく。  
「ね、こっち向きと、こっち向  
きにして、2人のシーサーが向  
き合うようにしたらどう？」  
「いいね。おかささん、アツク  
マイイジャン」

小生気な笑顔をきく5歳児だ。  
「これさ、できたらここにかさ  
る？ やねのうちはのせられ  
ないんじやない？」  
シーサーのしっばをコネコネ  
しながら聞く娘。そうね、玄関  
に飾って壁上げにしようか。

剛、足、鼻、目、耳、ペロと  
コネコネしていくうちに、あら  
不思議、シーサーになってきた  
じやない。  
「いいこと、いいこと、かんが  
えた！ シーサーのおくちにア  
メをいれるんだ」  
小さく丸めた粘土の閉子をシ  
ーサーの口にあっせむ娘。それ  
は……それって、猫だ？

いや、だけれど、5歳児の創造  
インスピレーション（？）によって前  
白いなと母はつくづく思います  
た。拾った目録を使った陶り輪  
漕ひのとまでだつて、目録をどう  
合わせて「これ、たびひとみた  
いでしょ」だつて。

「誰人？」  
わかりました、3歳児をつけ  
た時代劇に出てくる誰人の後ろ  
姿なの。もう、水戸黄門の見え